

裕二郎さんが手掛けた新商品は、思わず手に取りたくなるものばかり。対馬のお土産の新しい顔だ。



孝儀さんが最初に発売した商品も健在だ。

大石農園では柚子を使った商品も展開している。



対馬
Tsushima Island
Nagasaki Prefecture

もう一度、会いたい



大石孝儀さん(左)と息子の裕二郎さん(右)。「衝突することもあります」と言いながらも、お互いを尊重しながら、商品づくりに取り組んでいる。

親子で 対馬紅茶を広める

大石孝儀さん 裕二郎さん

ツ シマヤマネコが生息する佐護地区で対馬紅茶を栽培している大石農園を取材したのは、八年前。現在では、対馬で初めて紅ふうき茶葉の栽培に取り組んだ大石孝儀さんの

跡継ぎとして、息子の裕二郎さんが中心となって、農園を切り盛りしている。静岡県の食品メーカーで働いていた裕二郎さんが対馬に帰ってきたのは「ふるさとに貢献し

たい」という気持ちからだ。その夢を実現するため、裕二郎さんはいくつもの農園改革を行ってきた。茶畑の栽培面積を約一・五倍に拡張、それに伴って新工場を建設。さらには三十

種類以上の新商品の開発を行うなど、次から次へと新しいことにチャレンジを続けてきた。裕二郎さんが手掛けた商品は、デザインもさることながら、地域への想いにあふれている。例えばツシマヤマネコや対馬の在来馬・対州馬(たいしゅうま)をあしらったお茶缶には、それぞれの動物の生態が学べるミニ冊子が付いており、売上の一部は動物たちの保全・普及に役立てられている。裕二郎さんは、この商品のコンセプトを「豊かな対馬の自然への恩返し」と話す。

大きな変化は、もう一つある。海外への販路拡大だ。「私たちの商品名にはどれも『対馬』と入っています。商品が海外に出ることで、様々な国の人たちに『TSUSHIMA』を知ってもらえる機会になると思い、海外へ販路を求めました」。

地域活動にも積極的に参加している息子の姿に、孝儀さんは「頼もしい」と目を細める。

「新商品の開発はワクワク半分ハラハラ半分(笑)」と、父親らしい笑みを浮かべながら、「自ら対馬に帰ってきてくれたことに感謝しています。地域の人たちに認めてもらい、応援してもらっているのは、本当に嬉しいですね」と、息子への想いを語った。

裕二郎さんは、子どもたちに対馬紅茶を知ってもらおう活動も行っている。「地元の学校からの課外授業の依頼は、進んで引き受けています。それが子どもたちの糧になれば嬉しいし、楽しんでる姿がやがていづなう二代目の挑戦は、まだまだこれからが本番だ。



「幼い頃から見ている父の姿は仕事熱心で、本当に『働き者の手』をしています。私も恥ずかしくないようがんばりたいですね」と裕二郎さん。